ひょうたん島通信

大槌発! 第25回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

漁師さんの船に乗せてもらって思うこと

野畑 重教 大気海洋研究所海洋生命科学部門生理学分野 特任研究員

漁を終えカモメを従えて帰港中、この後水揚げが始まる。

大槌の沿岸センターにはサケ科魚類の研究で震災前から何度か訪問していた。しかし土嚢を持ち上げて椎間板ヘルニアで入院し、しばらくは大槌出張メンバーからは外されてしまった。約1ヶ月寝たきりになり一生歩けないのではないかと思った。その自分が今では3ヵ月も滞在して実験することになるとは……、よくよく考えるととても不思議である。

大槌滞在中はほぼ毎朝新おおつち漁協の定置網漁船に乗せてもらい、サケの行動を調べている。去年は水揚げでかなりこき使われてヘトヘトだったが、この冬は慣れたせいか種々無難にこなしてきた。漁師さんも毎日船に乗って網を引いている研究者に慣れたようで、とてもよくしてもらっている、感謝。今年は「サケのことを語り合いたい」とかで飲みにも行った。大してサケの話などしなかったが、漁師さんのプライベートの姿を見るのはちょっと不思議でもあり、呂律が回っていない姿を見ると面白くもありちょっとショックでもあり、でもまた少し距離が縮まったかなと嬉しく思う。

私がお世話になっているここ3年は、サケの水揚げは好調のようである。網を引き揚げていく途中から大漁かどうかがなんとなくわかってくるのだが、大漁だと網を引くもの大変だし、その後の水揚げも大変だし、朝飯が11時くらいなんてことにもなり、不謹慎ではあるがつい「あちゃ〜」と思ってしまう。漁師さんの中にも私と顔を会わせてニヤっと笑い「今日はやばいよ!」なんて口に出して言う方もいるが、それでも大漁旗を掲げて帰港する時は誇らしげでとても満足気に見える。この冬に回帰したサケの年齢を調べたところ、来冬4年魚となり水揚げの多くを占めることになるはずの3年魚が極端に少ない。来冬のサケの回帰がどうなるのか？少し不安である。大漁だと肉体的にはきついが、それでも漁師さんががっかりしている姿より誇らしげな姿を見たい。少しでも多くのサケが大槌湾に帰ってくるのを祈るのみである。

毎年少しずつメンバーが入れ替わっている。10年後この船のメンバーはどんな風に変わっているのだろうか？ 大槌の街はどう変わっているのか？ 時々考えることがある。そしてその時に自分の研究は何かの役に立っているのだろうか？ 今はコツコツと成果を積み上げていくことにしようと思う。

ぴーちゃん日記

大変お世話になりました

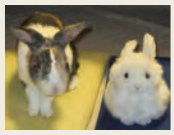
国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。6年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました、がまたお別れです。

早いもので、岩手大学から出向でふたたび沿岸センターに着任してから、あっという間に2年の月日が流れました。私事ですが、平成27年4月から岩手大学に戻ることとなりました。

平成25年4月に異動してきた当初は、在任中に新センター研究棟完成、とまでは行かなくとも、建設終盤で後任者にバトンを渡せるものと思っておりました。しかし被災地の復興は思ったようには進まず、前任者の東大職員である川辺さんが2年前に大槌を離れて私がまた着任した時と状況に大差はないように感じます。大槌町民の多くは今なお仮設住宅で不便な生活を続け、新センター研究棟や災害公営住宅の建設はもう少し先になります。新センター研究棟完成どころか、建築着工、いやそれ以前の設計の前に異動とは残念でなりません。4月からは岩手大学で被災地への復興支援を続けたいと思います。

皆様におかれましても、引き続き大槌町ならびに国際沿岸海洋研究センターの復興にご支援いただけますよう、よろしくお願いいたします。

思えば震災前からの長い間、東京大学の皆様には大変お世話になりました。どうもありがとうございました。



「2年間お世話になりました」(ぴーちゃんこと、本名ピーター君からご挨拶)。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）